

主 役

松竹の大船撮影所は木造の洋館が点在するモダンで明るい雰囲気だった。春になると桜並木が見事なトンネルを作る。その並木の右側が女優館、左側が男優館である。

私の履歴書

子 恵 岸

⑨

「睫毛を作るのよ」

「どうして！ 私の睫毛は長いです……」

当時のフィルムは感度が悪く、ドーランは厚塗り、眉も睫毛も誇張しないと映りがぼやけてしまう。おまけに糊がニスのようにドロリと重く、つけると目が開けられないほどしみる。はがすと自分の睫毛まで抜けるという恐ろしい代物だった。だから今の私に

黒澤明脚本の「獣の宿」

「山猫みたい」野性的に演じる

は睫毛がほとんどない。

床山室の隣に「結髪室」があった。名前の通り髪を整えてくれるが、今のようになんていらない。学生から映画界に入ったばかりの私はドーランを渡されてもどうしていいかわからず、闇雲に塗りたいくっ

て酷い顔になった。「恵子ちゃん、せっかくの顔が台無しだよ」と悲鳴を上げた結髪さんが化粧を教えてくれた。以降、なにかと世話をしてもらうようになった。

ある日、演技課長に呼ばれた。「昨日のロケになぜ行かなかったんだ」。私は本名を呼び捨てにされるのが嫌で芸名を考え、毎週変えていた。最後に決めたのが白鳥の湖をもじった「諏訪碧」だった。

「なんて読むんだこれ」「すわみどりです」

「なんだそりゃあ。男の名前だよそりゃ。自分にも読めないから、予定表にあった名前を見つけないかったのか」

予定表を見忘れただけだったが、芸名は認められず本名の岸恵子にされてしまった。間もなく私は京都へ行かされた。映画の女性主役がなかなか決まらず、候補の女性スターが寝台車に乗っているとかで、顔を合わせないように

したのか、同じく首実検に呼ばれたらしい私は三等車にチコンと座って夜を明かした。京都撮影所の暗いステージに入ると1人の男性の横顔がライトに浮かんでいた。「ご挨拶して」とプロデューサーに促され、私は誰へともなくぎこちない最敬礼をした。カメラ横から監督が身を乗り出したのか、同じく首実検に呼ばれた当時の若者たちを、ニヒルともとれる生々しい危うさで魅了した鶴田浩二という人だと私は知らなかった。

映画は黒澤明脚本の「獣の宿」。私は湖畔の旅館の孫娘で野性的な女の子だったように思う。あるいは私がやったから野性的になったのか。カメラマンが言った。



湖畔の旅館の孫娘役を演じた「獣の宿」(1951年、大曾根辰夫監督) 〓松竹提供

「目がキラキラとつり上がって、山猫みたいなすこい女の子が出てきたと思った」

鶴田さんは私を壊れ物のように大事にして

くれた。

「今のままでいいさ。この世界のあくに染まって、女優臭くなっちゃダメだ」

(私はそれほど素直で簡単な女の子ではないのよ)と言いたかったが胸の中でつぶやくだけにした。(女優)